

岐阜県支部だより

第8号 平成24年3月15日

- 1 — ◎巻頭言
- 2 — ◎支部研究会報告
- 3 — ◎ご案内

巻頭言

明るく、強く、希望を持って生きていくために、虐待の根絶を

教育相談学会岐阜支部顧問

堀口 昭

私が、定年を迎えた中学校では、登校できない生徒や、登校しても授業が受けられない生徒が多かったです。朝、校門で「おはよう」と声をかけたり、校内を巡視して授業を受けるよう促すのが日課になっていました。

そのような頃、生徒に指示をするだけの指導ではなく、生徒一人一人の心情を理解した指導がしたいという声があがり始め、先生方の研修意欲も高まってきました。この動きが、教育相談学会設立の原点となったのでした。県内の各学校へ呼びかけたところ、多数の参加希望者があり、岐阜県支部を設立し、日本教育相談学会へも加入する運びとなりました。平成3年、今から20年前のことです。それ以後、教育相談に関心を持つ先生方が、生徒指導のリーダーとして活躍いただいていることは、力強い限りです。

私は退職後、法務大臣の委託を受けて保護司を定年の76歳まで14年間努めました。この保護司というのは社会奉仕の活動で、「犯罪を犯した者及び非行のある少年の改善更生を助けること」が任務となっていますので、教育相談そのものであると思って努めてきました。

近年、親の虐待によって起きたあまりにも無残な事件が新聞等で報道されていますが、私が保護司として担当した中にも、脳裏に強く焼きついて忘れることができない事例があります。

少年が泣きながら見せた手の痣・・・・・・・・
小学校低学年の時、学校から帰って直ぐ宿題をしなかったことで、母親にボールペンの先で何度も突き刺された跡でした。その時の痛さと恐怖は、少年の中に、母親への恋しさと憎さ、そして信頼

を断ち切られた空しさなど、言葉にならない感情が重なっていったのでしょう。私は、少年の無念そうな泣き顔の背後にある、これまでの辛い生活を思うと、何と云えばいいのか言葉が出ませんでした。数分して、「辛かったね。痛くて、怖かったでしょう・・・。」と言うのがやっとでした。

私が担当した未成年者は、程度の差はありますが体罰や暴言などで、体や心に取り返しのつかないようなダメージを受けています。

このような現状があるにもかかわらずその対応は、親権や個人情報的大事にされることが壁となって、命の救済も出来なかったケースがあるなど、強い危機感やはがゆさを感じています。

学校の先生方は、子どもたちのおかしさに気付ける人です。何かの異常に気付かれたら、すぐに保護者と関わり善処して下さい。このことが困難な時には、関連機関へ連絡をして速やかに対応していただけるように強く要請して下さい。学校は、虐待を防ぐ最前線であり、皆でもあるのです。

反社会的な行為をする少年は、殆どが保護者から何らかの虐待を受けている・・・しかし虐待を受けた子は、必ず全員が犯罪的行為をするとは限りません。この事実を強く訴えます。早期発見・早期対応、そして暖かい人間関係の築き直しが出来れば・・・。

私は保護司としての経験から、「虐待をなくすことで、全ての子が未来へ向かって、明るく、強く、希望を持って生きていくことができる。」と確信しています。先生方には、この道の先導者として格段のご理解と協力をお願いする次第です。

☆ 支部研究会報告 ☆

第4回研究会報告

開催日：平成23年12月3日（土）

会場：岐阜女子大学（岐阜市太郎丸80）

○事例研究会

『A君から学んだこと』

～定時制高校での関わりのなかで～

岐阜県立華陽フロンティア高校教諭

森前 博行 先生

『別室登校だったB子へのかかわり』

垂井町立垂井小学校講師

中島 浩恵 先生

事例研究会では、2つの事例を提供していただきましたが、ここでは森前博行先生の事例を紹介します。



森前先生が提供して下さった事例では、定時制高校に通うA君の様子を通して、様々なことを学ぶことができました。生徒指導のあり方が高等学校によって全く違う現状にとまどいを感じていたそうです。A君と向き合っている時、最初のうちは「なぜできないのか？」という原因を探ることに終始して、原因探しで本人を傷つけるのかもしれないことに気付かれました。通学している間、退学している間、カウンセリングなど様々な場面で、A君の心情が変化している様子を的確につかみ、その都度、彼に合わせた対処法をとられていることがよく分かりました。つまずきをかかえて

いる生徒に対しどうサポートができるか、「生き方の選択」にどう寄り添っていけばよいのか、さらには「就労」の支援はどのようにしていけばよいかなど、定時制高校の抱える問題について具体的事例を通して考え、意見を交わすことができました。

第5回研究会報告

開催日：平成23年2月18日（土）

会場：岐阜女子大学（岐阜市太郎丸80）

第5回研究会が、2月18日（土）に開かれました。

全体会では、開会のあいさつ後、堂前計枝先生による第22回全国中央研修会についての報告があり、グリーンケアに関わる話などを聞くことができました。



○座談会

日本教育相談学会設立20周年を記念して、本年度は6月にシンポジウムを開催しました。担任、養護教諭、スクールカウンセラーなど色々な立場の先生方からこれからの教育相談についての話を聞くことができました。

今回の研究会では、前回のシンポジウムに引き続き、教育相談に関わる若い先生方の率直な意見や思いを聞き合おうという目的のもと、テーマごとに分かれて座談会を開きました。

座談会には、高等学校教諭、中学校教諭、小学校教諭、養護教諭、特別支援学校教諭、適応指導教室担当の先生など、色々な立場の方が参加されました。

「校内の教育相談体制・態勢づくり

外部機関との連携の仕方」

<各学校の相談体制>

- ・ ケース会議を週1回必ず開いている。（場合によっては週2，3回になることも）
- ・ 毎週生徒指導連絡会を開いている。
- ・ ケース会議に保護者が入る場合がある。
- ・ 心のアンケートを学期に1回行っているが、事例交流はしていない。

- ・ SCは月に1・2回の訪問であるが、臨床的な見地から言葉をいただけるので、学級担任は助かっている。
- ・ あらゆる外部機関の関係者を呼んで連携している。チーム支援シートを利用して役割分担を確認している。

<実態からみる課題>

- カウンセリングマインドを大切にしなければならぬのに、欠課が一定数に達したら単位を落とすことになり、矛盾を感じている。
- 幼・小、小・中、中・高の連携が課題である。それぞれ連絡会があるので、うまく活用していく必要がある。
- 責任の所在がはっきりしない、誰も情報をまとめる人がいないなどの課題を解決するために、コーディネーターの役割はこれからもっと重要になってくる。
- 教育相談担当の先生が力を発揮しやすい環境を整える必要がある。研修等で資質向上を目指す必要があるのではないかな。
- 担任の先生はすべてカウンセリングの技量をもたなければならない。
- 管理職が教育相談をきちんと理解しているかも問われるだろう。
- 教育相談が力を発揮するためには、行政との連携も必要になってくる。アメリカやフィンランドの例と比較して、必要な策を講じるべきだ。
- システム面と情緒面の両面から課題解決を図っていく必要がある。



「発達障がいのある児童・生徒への対応」

<理解と支援の現状>

- ・ 診断を受けた子に対し適切な指導をしているだろうか。
- ・ 学級に発達障がいの子がいるが、生徒指導的な

対応をしてしまう。親の不信感も出る。

- ・ 療育手帳を出す係りをしているが発達障害が入っていない。学校との連携が取りにくい。考え方のベースが学校と違う。
- ・ 特別支援・・・通常・・・だからではなく、その子の「困り感」を理解したい。
- ・ ねむっている子、地団駄踏む子、じっとしてられない子・・・担任を助きたい。
- ・ 小学校で援助がされていないと中学校で親に話を通じない。教員が理解と援助に乏しい。
- ・ 発達障害の子をどう理解し守るか。目立つ子ばかりでなく、静かに困っている子がいる。生徒指導的指導で不登校になる子がいる。残念ながら先生の理解がない。
- ・ 教科の指導の中ではどうしたらいいか。
- ・ 不登校の中にも発達障害があるのではないかな。
- ・ こういった研修会に出たい先生は多くいる。親とのつながりが難しい。
- ・ 環境作りと言葉かけが大切。二次的障がい大きい。小さな認めが大切。
- ・ 「生きにくさ」をどう他の教師に伝えていくか。親と学校が一緒にという姿勢が大切。



<実態からみる課題>

- 毎週企画委員会の中に相談担当やコーディネーター等を入れる。親との関係にはSCに入ってもらおう。
- 親が困って相談に行く・困っていることを理解して欲しいのに指導をする。又病院へ行けと言われる。子どもが困っている状態に添ってほしい。親と一緒に考えて欲しいのだ。
- SCさんは、共感はしてくれるが学校の中で発言権がない。
- 個の目標を3段階くらいに分けて達成させる。先生もそれを認める。全員同じではやる気も出ない。子どもが悪いのではなく、先生の取り組みが悪い場合があるのでは。
- 教師像、親像がそれぞれありすれ違う。自分は普通だと思っているが、親も先生も偏りがあるかもしれない。そこでは子どもの本来の問題は見えてこない。
- 上手くいかない子どもへのせいにする人がいる。特別支援教育の前に学級経営が大切。

- 教師も分からないことがあったら「教えてほしい」という。言えた時情報がいっぱい入るし、親とも一緒に歩めるのではないかな。
- そのことに対し教師間で気付き合う。声を掛け合う。
- 困っている子とは先生が困っているのだからその子の困り感を理解していない。



<座談会を終えて・・・>

学校だけでなく、スクールカウンセラーや他機関を含めそれぞれの立場や役割を生かした体制や実践における課題がでました。

そして、基本的な人との相互理解や人とつながることの重要性が再確認されました。

(文責：広報委員 小笠原 淳)

ご案内

全国大会会場を 岐阜で

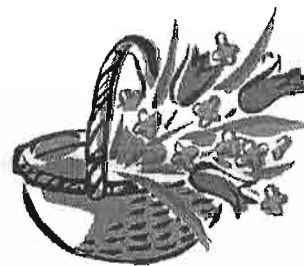
平成 23 年度に計画されていた全国大会（宮城大会）は、震災のために中止されました。罹災された皆様ならびその家族、関係者の皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

平成 24 年度は静岡で全国大会が行われます。そして翌年の平成 25 年度は岐阜において全国大会を行います。既に全国大会のための実行委員会

も立ち上がり準備を進めているところです。現段階で決まってきたことを以下に記します。

- 1 期 日 平成 25 年 8 月 9 日 (金)～11 日 (日)
- 2 テーマ 『 一人一人を認め、育て、つなぐ 学校教育相談 』
- 3 会 場 朝日大学
- 4 内容 (予定)
 - ① 総会 (8/10)
 - ② 記念講演 (8/10)
 - ③ 特別講演 (8/10)
 - ④ シンポジウム (8/10)
 - ⑤ 実践事例・研究発表会 (8/10・11)
 - ⑥ ポスター発表 (8/10・11)
 - ⑦ 会員懇親会 (8/10)

8 月 9 日 (金)には、全国支部の代表者会が行われますが、それと並行してワークショップも開催します。学校教育相談に関して全国的に活躍している講師を迎えて行う予定です。詳しいことは、分かり次第、お知らせしていきます。



24 年度も実行委員会を重ねながら準備を進めていきますが、岐阜支部の会員の皆様には基本的に実行委員としてご協力をお願いしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

(文責：事務局長 木村 正男)

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第 6 号

2011 年 (平成 23 年) 3 月 14 日発行

発行：日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集：日本学校教育相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ <http://www1.ocn.ne.jp/~sodangif/>

E-mail : sodan-gifu@plum.ocn.ne.jp